九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

岡田武彦先生の生涯と学問

https://doi.org/10.15017/18210

出版情報：中国哲学論集. 30, pp.92-132, 2004-12-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

岡田武彦先生の生涯と学問

福田　殖

一、誕生から大学入学まで

岡田武彦先生は明治四十一年（一九〇八）十一月二十二日に播磨風土記に名を残す姫路五十二万石の城下町として繁栄した旧姫路市郊外の白浜村で生を享けられた。白浜村には当時、広大な塩田があったという。今は白浜海水浴場として賑わっているようである。

播州播磨に生まれた先生は同郷の先輩として和辻哲郎氏（一八八九―一九六〇）を尊敬しておられた。和辻氏は、姫路の市街から北へ一里ほど離れた砥堀（とぼり）村、仁豊野（にぶの）の生まれで、岡田先生が旧制姫路高校の学生の頃までに、『偶像再興』（一九一八年）『古寺巡礼』（一九一九年）『日本精神史研究』（一九二六年）を出版して、名が知られていた。先生は、大学に進学する時期に、「東大に行って和辻さんに師事したい」と考えるようになっていた、という（『わが半生・儒学者への道』112頁）。ところが家庭の事情があって東大に行く機会に恵まれなかった。もし東大に行って和辻哲郎氏に師事したとしたら、今とは全く異なった道を歩かれることになったであろう。そのような先生は想像できない。

岡田先生は昭和三十四年（一九五九）五十歳の時に『楠本端山―生涯と思想』を出版された。楠山端山は、楠本正継先生の祖父で、山崎闇斎門、三傑の一人である三宅尚斎派に属する儒学者である。三宅尚斎（一六六二―一七四一）

は播磨明石の人で、先生の郷土の先賢である。楠本端山―晦堂―正継先生と継承された道統の自覚を先生は口にされることがあったが、そこには何か運命的なものを感じずにはいられない。

岡田先生の郷土愛には深いものがあった。白鷺城と称された美しい姫路城、特産の明珍火箸（みんちんひばし）の清涼な音色、六月のゆかたまつり、八月の姫路城まつり、十月の灘の喧嘩祭りなどに話題が及ぶと「私の村の秋祭りは灘の喧嘩祭りといって関西一円にその名がとどろいている」と言われ、目を細めて懐かしい気持を顔に表された。年を経るごとに郷里に行かれる回数が増し、旧知・旧友の人々との交流は絶えることはなかった。

三宅尚斎は学統につながる郷土の先賢であったが、近くは播磨聖人と称され、明治天皇の侍講に擬せられた醇儒・亀山雲平を非常に尊敬され、『論語』にある「温・良・恭・倹・譲」の徳を備えた儒者であったらしい、と称賛された（同書17頁）。三宅尚斎や亀山雲平のような温厚篤実な風格は岡田先生の中にも見られる。単なる偶然ではないであろう。亀山雲平に師事した先生の父君もまた白浜聖人と称された、という。

岡田先生は六人兄弟の末から二番目、男兄弟の末っ子で、親戚の人々からも可愛がられたという。常に温容をもって人に接し、怒気を発したことがなかったと回想される先生の父君の血脈を引きついでおられると思われる。岡田先生は門下生に対して、諄々と説得することはあっても、怒気を発することは全くなかった。訪問の意を伝えると、いつでも、誰でも差別なく承諾され、会うと温顔をもって接して、忠恕のまごころをつくされる方であった。人生には左も右もない、ただ、まごころが大切である、と私達に暗黙のうちに示されたのであると思う。講義や演習では、少しく様相を異にしていた。特に演習では原典の厳密な解釈を通して発表者を徹底的に鍛えられた。時に禅における一挨一拶にも似た言葉で問題の核心をつき、発表者をたじたじとさせる場面もあった。講義は原典資料を読みこんで思想家と同じ心になり、思想上の問題を解決するという独自の方法をとられた。

岡田先生の遠祖は、元寇の時に名を馳せた武将の一人、河野通有であったという。そして江戸時代には姫路藩、酒井侯の藩医を務める家柄で、代々、医を業としてきたとのことである。六代前の祖先、岡田南江は儒医であったというから、医を業としながら儒学も子弟に教えていたのかも知れない。

岡田先生の幼少年期は大正デモクラシーの時代で、自由な雰囲気の中で成長されたようである。家庭は裕福ではなかったが、つつましく助け合う家族で成り立っていた。家庭の教育は一見、放任主義であったが、その奥に深い慈愛の情を秘めた、寛容と大度で行なわれていたという。寡黙で温かい心をもった祖母、温厚で親孝行な父君、隣村の資産家の家に育ち、良妻賢母型の母君、そしてつつましくお互いを助け合う六人兄弟、このような家族の中で先生は成長されていった。温厚で孝養をつくす父君も、一面、儒者気質の持主で、道義的精神を発揮されることもあったという。母君は理知的な感じのする女性で、子供の教育は「甘えさせてもいけないし、叱ってもいけない」というのがモットーであったという。長兄は負けん気の強い性格であったが、幼少の先生は、おとなしい性質で、遊びも一人でするのを好む子供であったという。「中学生の頃の想い出は何といっても水泳である」（同書75頁）と回想されているが、多くの人々で賑わう白浜海水浴場でも、人々から離れた場所で一人で水泳を楽しんだという。後に先生は、「元来余は、孤独を愛する人間、孤独の中に身を置くことによって人生の苦悩から逃れようとする性格の持主かも知れぬ。『斯（こ）の人の徒と与（とも）にする』とは晩年の心境である」（『陽明学つれづれ草』46頁）と述懐しておられる。

家庭環境という状況が幼少年の先生の人格形成に大きく関わっていることを知ると共に、後に宋明儒学思想を学ぶことによって、その思想に通底する理想的人間像の追究（聖人志向）と人格の陶冶（気質の変化）を深く実践されてきた先生の生涯の軌跡を知ることができる。

岡田先生は、「中学三年頃から世の中の矛盾を感ずるようになった。性格はますます内向的になって行った」（『わが半生・儒学者への道』81頁）と述べ、そして旧制高校に入ってからは、ますますひどくなった、と言っておられる。先生は少年期に、世の中の矛盾を感じて衝撃的な動揺を受け、自己存在の謎にぶつかって根源的な問いを発したのであったと思われる。後年、八十四歳の先生は次のように当時を回想しておられる。

私が倫理哲学に志すようになった動機は、家庭内における諸々の矛盾を痛感したからである。この矛盾が、誰にでも悪の根源であることを知ることができるようなものであれば、私はそれを見ても苦悩に陥ることはなかったであろう。父といい母といい、兄といい、皆、善良の人である。その行ないが矛盾をはらむようになったので、

私は苦悩したのである。高校に入った時、ある教授に私はこの矛盾を見て苦しい思いをしていると語ったところ、その矛盾から目をそらさずに徹底的にそれを凝視するよう教えられたことを覚えている。しかし、矛盾は後になって自分自身の家庭の中にも起こった。これが、私をして一層苦悩に陥らせる主因となったことは、何という皮肉なことであろう。(『私家版・岡田武彦先生語録』107頁)

岡田先生の哲学者としての原景は、すでに少年の頃に見られ、根源的に問う哲学的思索は一生を通して間断なく行なわれたものと考えられる。衝撃的な動揺を感じて、自己喪失の苦悩を味わい、根源的な問いと認識を通して、独自の哲学の確立を目指した一生であったと言えるであろう。

岡田先生は終生忘れることのできない二大恩人の写真を書斎に飾り、常にその前で学問実践をしてこられた。一人は後に日本電気の社長になられる、当時、住友本社で、先生の兄の上司であった渡辺斌衡(としひら)氏である。渡辺氏は岡田先生が家計の都合で大学進学をあきらめていた時に、大学進学をすすめ、学費等の経済的援助をされた恩人である。先生が渡辺氏の経済援助によって大学進学が可能になった時には、すでに東大・京大は願書提出の締切が過ぎており、受験がまだ出来たのは、東北大学と九州大学であったという。先生は暖かい九州の地を選び、関門海峡を連絡船に乗って福岡に遊学されたのである。都から遠ざかる連絡船の上で、一抹の淋しさを感じられたという。あと一人の恩人が、生涯、学問の師として仰ぐことになる、当時ドイツ留学から帰国間もない、新進気鋭の少壮学者、楠本正継先生である。

岡田先生が楠本先生と出会ったのは偶然であったが、まことに運命的な出会いというほかないものを感じる。先生は姫路中学から旧制姫路高校時代にかけて人生の矛盾に苦悩し、文芸や哲学、宗教(特に禅)に興味を抱き、根源的にものを問う哲学青年であった。そのような先生にとって大学の講義は必ずしも満足できるようなものではなかったらしく、一学期間、悶々として日を過していた。ところが二学期になって、楠本正継先生の『伝習録』の演習の授業に出席して非常な感激を覚え、「この先生こそ終生わが師とすべき方である」と心に誓った」という(『わが半生・儒学者への道』125頁)。その時、昭和六年(一九三一)先生二十二歳の秋のことであった。先生が旧制高校生の時に作っ

た「己が身と己が心のもろもろをなべて捧ぐる人ぞこほしき」という和歌の心は、楠本先生との運命的な出会いによって充足され、生涯変ることはなかった。

二、九州大学の学生時代

岡田先生は九州大学法文学部入学以来、楠本先生に出会うまでも、そして出会った後も精力的に中国哲学以外の講義や演習にも出て学問的精進に励まれたようである。主として哲学・倫理・国文学・中国文学・東洋史などの学科である。模範的学生であったと言えよう。楠本先生に師事することが決まってからは、水を得た魚のように、研究室に足繁く通って、学問的研鑽を積まれた。

大学二年生の時には、中国哲学、中国文学、東洋史の教授と、学生との合同研究会が開かれ、その世話役となって活躍された。研究会では必ず洋食が出たが、その費用は、大学本部の学生課に行き、政府支給の思想善導費をもらって洋食代に充当したようである。その研究会は毎学期（年二回）開催され、教授陣と学生側から、それぞれ研究発表が行なわれ、先生も一度、宋学の祖といわれる周濂渓について発表された（同書133～134頁）。

先生は後になって当時を回想し「余が中国哲学を専攻するようになったのは、宋学の祖といわれる周濂渓の人品思想に魅惑されたからである。余は今でも、黄山谷が「灑々落々、如光風霽月」と評した濂渓の人品に憧れ、このような境地を持つ人間になりたいと思う（『陽明学つれづれ草』153頁）と述べておられる。思うに、先生は中国哲学研究の出発点と到達点とを周濂渓においておられたと推測することができよう。

岡田先生は昭和六年（一九三一）入学、昭和九年（一九三四）卒業で、その時期の楠本先生の講義・演習の題目は次の通りであった。

昭和六年（第一期）「先秦哲学史」第一部。「支那哲学史」演習（王陽明『伝習録』）（第二期）「先秦哲学史」「支那哲学史」演習。

昭和七年（第一期）「周易講義」（文求堂版『周易本義』）演習「老子」（王弼注『老子』）（第二期）「支那哲学史」演習。

昭和八年（第一期）「支那哲学史」演習（戴震『孟子字義疏証』）「宋学史」（第二期）「支那哲学史」演習（前学期に同じ）「宋学史」。

これをみると、先秦思想から宋明思想、そして清朝思想まで、さらに儒教思想だけでなく老荘思想を含む広範囲な領域について学ばれたことがわかる。当時の楠本先生の学風は、西洋哲学の方法論で中国の哲学を分析、解明するやり方であったようで、授業中でもドイツ語を用いて説明されるやり方であったという。後に楠本先生も岡田先生も、東洋思想の研究は、西洋的な方法で行なうことは間違っていることに気づき、その方法論から脱け出されたという。しかし当時は欧化主義が流行し、西洋哲学の方法論が一般に好まれており、岡田先生の卒業論文のテーマは朱子学であったが、先生も「西洋哲学の方法論に従い、オントロギー（存在論）の立場から朱子学を解説し、それを卒業論文にした」（『わが半生・儒学者への道』138頁）と述懐しておられる。

その卒業論文は福岡の空襲の時に焼失したそうであるが、今、手元に「易に於ける中正と倫理問題」というレポートのコピーがあり、これを読むと、当時の学風の一端をうかがい知ることができる。このレポートの表紙には、「楠本教授　支那哲学史論文　昭和六年入学　岡田武彦」とある。推測するに、楠本先生は昭和七年に『周易本義』をテキストとして「周易講義」を行なっておられるので、このレポートは昭和八年三月頃に提出されたものであろう。二〇〇字詰原稿用紙五十七枚にまとめて提出されたものである。

『周易』の吉凶悔吝という価値判断は如何なる標準によるのか、という問題提起から始まり、価値判断と道徳価値との関係、吉凶悔吝の判断の中心は中正にあり、中正は一種の社会道徳とみなされると続く。次に『周易』は乾・坤より始まり、既済・未済に終る弁証法的発展の連鎖をたどって行ったと分析。更に『周易』より『中庸』までをギリシャ哲学の観方と比較検討する。

そして結論として、

『易経』では倫理の根本問題たる「当為」は人間の意識に昇らず、sollen の命令は神秘力をもつ天帝鬼神に属するものとされた。次に「繫辞伝」に至ると倫理的意識が存在し、道徳の中心である中正の徳を begründen せんとする傾向があり、徳の根源を人間の見た自然に帰属せしめんとした。これは『易経』の倫理思想が一段と発展した跡である。『中庸』に到ると人性に対して哲学的観察が行われ、sollen の本源を人性に求めんとする傾向がある。これは『中庸』における道徳の begründen が一層科学的になったものである。

と結ばれている。文中には、「正・反・合」の弁証法的発展とか、sollen, müssen, begründen, glückseligkeit というドイツ語の哲学用語が散見する。当時、マルクス主義哲学が流行し、また、このレポートが書かれた一九三〇年代の始め頃は、ドイツ哲学、なかでもハイデッカーの実存哲学などが紹介された時で、その講義を聴講されたことと深く結びついていると思われる。この頃の論文は、用例をあげて実証的に西洋哲学の方法で書かれている。

二十代前半頃、ハイデッカーの哲学概念である「現存在」などに興味を覚えた先生は、後年の昭和五十九年（七十五歳）の時においても「Dasein あるのみ、sein はなし」と述べて、若き日の影響をとどめておられる（『私家版・岡田武彦先生語録』31頁）。

このレポートの結論に入る直前に、岡田先生は、「『易経』から『易伝』を経て、『中庸』に到ると、道徳は外的な天に非ずして人間の性と離るべからざる天にありと考えられ、即ちこれ道徳性を人性に求めんとしたものと言う事が出来る。「天命之謂性」とは実にそれを表示するものであろう。」と『中庸』第一章の語をあげておられる。『易』と『中庸』とは、宋明儒学思想の核心部分にあたる。『易』と『中庸』が研究を要する道徳学説として、先ずとりあげられたのである。そして人生如何に生くべきか、という普遍的で永遠の課題の究明がなされたといえよう。「経典」という過去の精神的遺産の蘇生がはかられたのである。この時、楠本先生、三十五歳、岡田先生、二十三歳であった。後に、楠本先生葬儀の際、岡田先生は、その霊前において、『中庸』の第一章を詠まれることになるが、その遥かなる原風景を、このレポートの中に見出すことができる。

岡田先生の同級生には、四歳年長の山室三良先生（後の九州大学教授）と三歳年長の大浜皓先生（後の名古屋大学

教授）がおられ、中文の同級生には大野得雄先生（後、福岡市街にある光圓寺の住職、楠本先生の告別式は、この寺で行なわれた。）がおられた。

岡田先生は、卒業年の三月、教授会で副手採用が決まってから、楠本先生に従って同行四人とともに中国に旅行する。この間に先生の身分に変化が生じた。その結果、富山市の神通中学校教諭として赴任されることになった。副手の給料よりは、中学校教諭の給料は、三倍近い。しかも当時は就職難であった。周囲の方々の配慮と母君が就職を承諾したこともあって中学校教諭として富山に行かれることになったようである。

卒業研修の中国旅行は昭和九年のことで、当時、北京市街の壁のあちこちに反日感情を示す張り紙があったという。三年後の一九三七年に日華事変が起こる前の雰囲気を知ることができる。また研修旅行の一行を監視するために刑事一人が同行した話も、暗い時代を象徴する話である。

この研修旅行では、楠本先生に随伴して美術骨董店をまわり、そのことが機縁となって、骨董愛玩癖が昂じ、後に骨董品あさりをするようになった、という。しかしこの経験が、後日、美術品を通して精神文化を考察する、すぐれた著作を刊行される機縁となったことを考えてみると、暗い時代の中における一服の清涼剤となったと言ってよいであろう。

先生は昭和六年四月（二十二歳）大学入学してから間もなく同じ下宿屋に住んでいた農学部事務職の方と知り合い、やがて結婚される。その方は柳川藩士の家系の女性であった。学生結婚のはしりであったと言えるのではなかろうか。

先生は中国哲学の勉学のほかに、後に簡素の精神を好むようになったことと深く関連があり、長い間、心の指針の一つとなった、カントの『実践理性批判』の中の「無上命令」（汝の行為の格率〈単に主観的に妥当する行為の規準〉が同時に普遍的法則たりうるように行為せよ。）という語に興味と魅力を感じたという。カントについては楠本先生もドイツから『カント大全集』を購入帰朝されていて、朱子とカントの比較論の話をされたとのことである。カントに興味を持っていた岡田先生は、カントのゼミにも出席して原書を通して研鑽を積まれたが、ドイツ語の語学力が十分でなかったので苦しまれたごとくである。西洋哲学関係では、ショーペンハウエル・ディルタイ・リッケルト・フッ

サール、さらにエックハルト・ベーメなどの中世キリスト教神秘主義者の訳本も精力的に読まれたという。昭和初期の旧制高校から大学の哲学科（中国哲学専攻）に進んだ学生の学習の典型をうかがうことができ、興味ぶかい。

三、中学校・長崎師範・幼年学校の教師時代

昭和九年四月、二十五歳の春、索漠たる気持で、みぞれ降りしきる寒い富山駅に降り立ち、県立神通中学校に赴任されたという。先月まで大学の副手となって学究生活に入ることを夢見ていた人生航路が一転して、暗澹たる気分に満たされた若き先生の心中を推測することはできない。先生は副手から一転して中学教師の道を歩かねばならなかった事実について語られながら、通常よく聞く、いわゆる愚痴ぽいことは一言も言われなかったからである。

富山時代は禅寺で参禅にはげまれたけれども、一向に埒が明かなかったという。その理由は、禅仏教と老荘思想を超克して古代の儒教を止揚し、それによって、これらを批判した宋明の新儒学に心を寄せるようになっていたからである（『わが半生・儒学者への道』165頁）と後日、回想されている。

富山の中学教師の時代は、長女・次女が相次いで病気し、夫人も肺を悪くし、先生自身も病気がちになり、医者に転地療法をすすめられて、宮崎県の延岡中学に転任することになった。延岡中学の国語教師に富山出身者がいて、その方と交換で転任することができたとのことである。

きびしかった富山時代にも想い出の教え子が存在した。高松敬治氏である。氏は警察庁刑事局長、防衛施設庁長官を歴任した方である。中学生の高松氏は家庭のことで悩みをかかえており、岡田先生は旅をすすめて、当時旧制高校生であった高松氏を延岡にまねいて、人生、社会、学問の問題などについて話し合ったという。筆者は、たまたま、高松氏が警察庁刑事局長の時代に岡田先生に随伴して、高松氏に会ったことがある。夕食をご馳走になり、鎌倉までお二人について行った。師と弟子との間に通う温かい信頼感が、お二人の間に独特な雰囲気をかもしだして、古色蒼然たる古都の中で、そのまわりだけが明るい感じがした。その時は夏目漱石も、しばしばこの古刹に来たのだという

話を聴いたようであるが、細かいことはすべて忘却の彼方に行き、お二人を包む明るく暖かい空気だけを記憶している。

宮崎県の延岡中学時代はわずか二年間であった。中学校には魅力のあるよい教師が何人かおられたが、特に強い印象をのこし、生涯忘れることのできない岩切先生のことを後日なつかしく回想されている。

延岡中学時代には、もう一つ重要なことがあった。召集令状が来て、郷里の姫路聯隊に入隊することになったことである。姫路に向う車中で、『荘子』を読んで、心の安定を求められたようである。入隊して身体検査の結果、即日帰郷を命ぜられ、延岡中学に帰った。そうしたことがあって、延岡は在任二年という短期間で去ることになり、恩師がおられる福岡市の中学修猷館に赴任することになった。昭和十五年四月、先生三十一歳の時である。修猷館の生徒はみな優秀で、教師の指導がなくとも自分で勉学に精を出し、教師も研究に没頭できた、という。生徒の中にも想い出に残る者が多くいたと何人かの名をあげて回想されている。その中で先生が「流暢な英語で同僚を驚かせたアメリカ帰りの滝口君」（同書197頁）と評されている滝口氏については筆者にも思い出がある。それは昭和五十二年、岡田先生六十八歳の年、米国、加州のモンテレーで「清朝初期思想学会」が開かれたが、筆者と牛尾弘孝氏（現、大分大学教授）は先生に随伴して学会に出席、そして米国滞在中、滝口氏に岡田先生ともども私達も大変お世話になったのである。私達は学会終了後、滝口氏の自動車で広大な米国を案内された。グランドキャニオンの壮大な景観、渓流ぞいの山小屋での昼食、フェニックス市での楽しいひとときなど、私達をもアットホームな気分の中でもてなし、米国旅行を思い出深いものにしていただいた記憶がある。岡田先生の周辺には、いつも心暖かい信頼関係に満ちた人々がおられたように思う。

岡田先生が延岡市から福岡市に帰ってこられたのは三十一歳の時で、楠本先生は四十三歳であった。その時、楠本先生の学風が変わったことに気がつかれたようである。恩師が宋明思想の研究には体認が重要であることを悟られたためではないかと思う（同書198頁）と述べておられる。

岡田先生は九州大学の研究会で、王門の欧陽南野の思想について発表する一方、楠本先生に申し出て、清の王白田

の『朱子年譜考異』の読書会を開いてもらい、毎日曜日の午後、楠本先生の自宅を訪問して学問的研鑽を積まれた。

また時局の影響もあって『孫子』を読みかえし、「兵法の形而上的考察―孫子の兵法」という論文を書かれたが、それは『時潮』という雑誌に掲載された。

昭和十五年か十六年の三十一歳か三十二歳の頃、岡田先生は楠本先生から、すすめられてオイゲン・ヘリゲルの『弓術の話』の日本語訳を読み、心を動かされたという。さらに戦後にヘリゲルの『弓と禅』を読み、先生の学風にかなりの影響があったという。ヘリゲルは弓道の根本は技にあるのではなく、心、すなわち無心の心にあることを悟り、帰国後、日本の弓道に関する書物を著して、ヨーロッパに普及させた人である。先生は「日本の神秘主義が西洋の合理主義に打ち勝ったといってもよいであろう」（同書208頁）と高く評価されたが、このヘリゲルの考え方は、後に「技と心」（昭和二十七年、「哲学年報」第十三輯）という論文にも引用されて、東洋の実践的工夫の意義と特質を解明されている。

先生の最初のご令室は昭和十六年、先生三十二歳の時に病歿された。十年ほどの結婚生活で二人の女児を残してであった。その後、楠本先生ご夫妻の仲介によって、福岡藩士の家系で祖父は藩の儒学者であった女性と再婚された。今の令夫人である。

この様な家庭の事情があって、先生は福岡から離れる決心をし、昭和十八年四月、三十四歳の時に創設間もない長崎師範専門学校に赴任されたが、空襲がひどくなり、勉学どころではなくなったので、思うところあって、昭和二十年一月、熊本陸軍幼年学校に転任されることになった。

長崎では軍事訓練と生徒を軍事工場に引率していくことで明け暮れ、空襲により、防空壕に避難する生活が続いたようである。また学徒動員で戦地に向かう彼らを見送ったときのことは、忘れようとしても忘れることができない、と述べておられる（同書221頁）。

熊本では、軍の学校ということで授業はやりやすく、校内の生活も快適であったようである。戦争の末期の頃、先生は教室で授業中に、突然米軍機の空襲があり、急いで生徒を防空壕に避難させた後に、ご自分も避難しようとした

ところ、米軍のグラマン機に銃撃され、弾丸は足もとをかすめて生命拾いしたという。また長崎に原爆が投下されたとき、校庭から西の空を見ていたところ、鈍い音が聞え、きのこ雲が西空にひろがるのが見えた。長崎に勤務していたら、おそらく被爆していたに相違あるまい、と回想されている（同書224頁）。

昭和二十年八月十五日、終戦とともに陸学幼年学校は解散になった。半年ばかり熊本で静居しておられたが、昭和二十一年四月に再び修猷館に単身赴任されることになった。時に三十七歳の春であった。一年後、先生一家は白木原（現、大野城市）に転居されたが、生活は苦しく、令夫人も石けんを売り歩いて生活費を補ったとのことである。昭和二十三年六月二十五日、次男の修さんが疫痢にかかり、急逝する。その一週間後、長男の靖彦さんに疫痢が伝染したが、名医の原実先生の治療のせいで回復することができた。次男、修さんの死亡で家庭内は落着かず、いろいろのことがあったが、修猷館の生徒が、よく遊びに来てくれることと、家庭で研究会を開くなどしたことで、何とか暗い状況を乗り越えていかれたようである。

この白木原時代には苦しいこともあったが、また近くに住んでおられた、当時、九州大学の中国文学講座教授、目加田誠先生との交流は楽しいひと時であったようである。目加田先生は中国文学だけでなく日本の文学や芸能にも造詣が深く、豊かな文学的才能に恵まれた学者で、啓発されるところが多かったと述べておられる（同書230頁）。

修猷館時代には、新聞部が校友会に認められたとき、初代の新聞部長になったこと、修猷館新聞は生徒が発行した新聞としては、九州では初めてであり、関西以前では第二番目であったと回想されている（同書232頁）。新聞発行にかかわった人々について、「松岡君を中心に高久保・有田・吉村・諸岡・二村君などが企画してこれを実施した。このうち二村君はもっぱら論説を担当した」（同書231頁）と六名の方の名前があがっている。この中の二村氏については筆者にも思い出がある。

平成六年四月八日～十日、岡田先生八十五歳の時、福岡市で、「シンポジウム・『貝原益軒を考える』・『東アジアの伝統文化国際会議』」が開催された。国内、国外から著名な学者が多数、来福し、多くの人々の協力によって盛会であったが、なかでも会長の岡田先生を助けて、物心両面から強力に支えたのは、副会長兼事務局長の二村健次郎氏

（当時、読売プロジェクト社長）であった。二村氏の献身的な支援協力なくしては、シンポジウムも国際会議も、あのように盛会裡に完了することはなかったであろう。はるか昔の修猷館新聞発行の頃の熱い情熱と理想が時間をこえて脈々と傳えられていたようにも考えられ、岡田先生のまわりには、常にすぐれた才能の持主、豊かな人材が集まってくることを実感した。

修猷館時代には、前述した「技と心」という論文が書かれている。岡田先生は「ヘリゲルの『弓術の話』によって教えられた体認の道を探るために、先ず日本の武道・芸道の精神を研究することにした。そこで、柔剣道の書や茶道・能楽に関する文献を読み漁り、そして、中国の『荘子』『列子』の中に出てくる名人芸に関する寓話を読んで、「技と心」と題する論文を書いた」（同書232頁）と述べておられる。

この論文では先ず「東洋では学の求めた理念は実践理念である。わざの習得も一つの実践的工夫であり、心の工夫である」と問題提起をされる。次いで「東洋の理念は、西洋のそれとちがって、全く行ずることによって得られたものである」「かかる行の工夫は神秘的経験である」とし、西洋との比較を通して「東洋の実践主義は自然主義に本づくもの」と規定して、東洋の実践的工夫の意義と特質を説明。ついで「無は東洋の根本理念である。如何にして無なる実践理念が得られるか、実践的に主体自身が無になるより無なる実践理念に到達する方法はない。実践的工夫によって純粋経験を持つことが重要である」と強調される。

更に「茶道や能楽も、無なる実践的理念を体得して、それをわざに還元することにその究極を求めた」「武道にも亦それを認めざるを得ない」と指摘し、「武道における精神的な自覚は、武士道精神、及び禅と道学（宋明儒学）の大きな影響があった」と論及し、「参禅して心を開悟し神技の妙用を極めんと欲する」「剣禅一味」、武道の事（わざ）理（心）一体は道学の体用一体の道を事とするものである、と発出影響を論じておられる。

後半では「武道のわざが如何にして心に帰せられるのであるか」について、弓道と剣道を例にあげて論及される。「心は気を主宰してわざをなす主体」「武道でも心の工夫は絶対心に達することが求められ、絶対無なる理念が体悟された。絶対心とは無心の心」「我を捨てて無我になり物我一体となる」「絶対心とは無無の心、即ち無心の心である」

「わざや力は敢へて人間の意思を用いずして、すべてが内的に発展する自然の生命力に任ぜられる。それが即ち神技である。それは全く絶対無の発露である」とわざが結局心法であることを立証されようとした。さらに、わざが心法であり、その究極が無心の心であることの例として剣道について述べ、「剣道のわざにおいて絶対無の心を如何に必要とするかは、身と太刀との懸待の法である。……此の法に従わんとすれば、自ら生死の念を超脱しなければ不可能である。此の生死の念の超脱は、儒学の心法に於ても重要なものの一つであり、殊に仏教に於ては生死の関の突破は、見性悟道の第一義諦とも見做し得るものであった」と強調し、柳生宗矩の剣法をとりあげる。無心に至る最初の工夫は、心を専一ならしめることで、それは宋儒のいう主一無適の敬と同じ工夫、宗矩も剣法の敬をそのようにいう。また宗矩は、「心が一処に留まれば執着が生ずる」のを戒めているが、そこで宗矩は禅のいう応無所住而生其心とか前後際断とか不住心等のことばを以て剣法の心を説いたのである、と比較分析をされている。

最後に結論として「無心の心に於て始めて無なる理念が体悟される。それは必然的にわざに還元して神技となる。注意すべきことは事理一体論、心気形一体論が唱えられた如く、その心は何処までもわざを修め、わざに即して心気を修めることによってのみ達し得るものでなければならない」とし、柳生宗矩や宮本武蔵のことばをあげて「剣道に於ける絶対無の理念が如何に広範囲なる形気心の練磨を経て到達し得たものであるか」が自ら明らかになると思う、と論断されている。

この論文から先生の思想的営為の形体、あるいはその思惟構造を抽出しようとは思わない。確かに存在するものは、自分はこのように考えるという先生の生の声だけで、それこそが、最も重要なことがらである。

先生自ら後に次の如く述べておられる。

この中で私は超越思想と芸術の関係、技術と精神との関係を論じた。この論文はその後書いた多くの論文の中でも最も独創的であったと思う。この作業を通じて私はますます体認の学の重要性を痛感するようになった。そして、そこに私の少年の頃からの悩みを解決する関鍵があるように思われてきたのである（同書233頁）。

先生は知識や思弁のような抽象的思惟によらず、実践的純粋経験に従うべきであると考え、これ以降、進んで体認

しなければならない、とくり返されるようになる。先生の学問方法といえば、ただ一つの方法であるかのように、はっきりとくり返し強調し、教えられるようになったのである。

四、九州大学時代（一）

昭和二十四年（一九四九）四月、新制大学創設にともない、先生は九州大学教養部に助教授として赴任された。念願の研究生活に入ることができたのは、先生四十歳の春のことである。その頃、白木原の住居では、よく学生が遊びに来てくれたので、心は索漠たるものではなかったと述懐されている。この頃、先生は、「田坂君とカントの『第二批判』を読んだ」「また、九大の卒業生や学生ら数人と『論語注疏』の読書会を作り、私宅の二階でこれを一緒に読んだこともある。炊事するときの煙が畳の隙間から上がってくる中での読書会は想い出の深いものがある。」（同書238頁）と懐旧の情をまじえて語っておられる。「田坂君」とは修猷館高校から九大文学部の哲学科（哲学専攻）に進学、昭和二十九年に卒業した田坂亮氏のことであろう。先生は大学二年生の時、レクラム文庫本の『第二批判』をゼミで読んでおられた。田坂氏は修猷館の時の教え子の一人であろう。『論語注疏』を最後まで読み終えたのは、「鈴木喜一君であった」（同書）とある。鈴木氏は昭和二十三年三月卒業、中哲出身の方で、後に信州大学教授になられた。岡田先生は後に、いろいろな読書会を組織して人々と一緒に原典を読むことを楽しまれたが、その原風景をこの頃に見ることができる。この頃、健康上の問題もあって、よく臥思された、という。臥思という行は、後に臥坐に進み、逝世まで続いた独特な行であった。

昭和二十八年、四十四歳の夏、先生ご一家は白木原から福岡市大橋の県営の分譲住宅に引越された。その時、筆者は中哲の先輩である隈本宏・佐藤仁両氏と藤棚造りを手伝った記憶がある。間もなく住居が手狭であったため、庭に六畳の書斎が建てられたが、これは令夫人の持参金で、まかなわれたと後日聞かされた。ここが先生の終の住家となり、先生は、こよなく愛された書斎の中で大往生をとげられたのである。

昭和二十年代は、日本中が貧しかった時代であった。六人家族をかかえて、先生も清貧の生活をおくっておられ、洋服の新調もできず、質屋に行って古物を購入されていた。筆者は当時、大学生であったが、アメリカの放出中古背広を千円で購入して着ていたことを思い出す。その頃、先生は書斎名を高眠斎と命名された。宋代の詩人、邵康節の詩集『伊川撃壌集』中の一句、「貧苦と雖も高眠に碍げ無し」に由来する。「高眠」には「高枕安眠」と「閑居」という意味があるが、「清貧」というイメージがよく合う。清貧の中で、念願の学究生活に没頭したいという思いが、こめられているような気がする。

岡田先生は大学卒業後、「兵法の形而上的考察」（昭和十五年）と「技と心」（昭和二十一年前後の原稿）を書き上げておられたが、九大赴任後は精力的に論文を書いていかれた。昭和二十七年の『哲学年報』（第十三輯）に掲載された「技と心」は数年前完成の原稿である。同年の『哲学年報』（第十四輯）には「劉念台の誠意説」を翌二十八年には「東林学の精神」を『東方学』六号に書かれている。以下毎年のように論文を書いておられる（論文目録参照）主として『哲学年報』（九州大学文学部哲学科紀要）『テオリア』（九州大学教養部哲学科紀要）『九州中国学会報』を中心に絶えることなく書き続けられた。

岡田先生は「技と心」という論文で、伝統的古典に対する信を新たにする心法を練られたといえよう。そして東洋的無心の心を得んとする努力を続けられたのである。その後、学究の道に入り、渾身の力をこめて書かれたのが、「劉念台の誠意説」である。この論文こそが先生の全論文の基本であり、代表するものである。原典を徹底的に読みこみながら、道とは何かを問う精神の緊張を継続しながら、道徳的価値の世界の中で、王陽明と劉念台の学説の比較分析を厳密に行なわれた。

念台は誠意を以て学の頭脳とはするけれどもただ本体を掲げて工夫の要を無視しようとする当時の王学亜流の弊を見て、工夫を主とする本体工夫論を唱えた。……このように本体即工夫として両者の一体を論ずる点よりすれば彼は東林と同じ立場にある。ただ東林は本体を静粛なる理に求めたが念台は意に求めたから、念台の工夫には自ら内なる心の源泉から発露する力強さがあり、それだけに本体工夫の一体性が一つの生々しいものとなって、

工夫しながら工夫を超える絶対の立場が一層鮮明となるであろう（同論文、79頁）。

王学亜流や東林学の人々との対比を通して劉念台の誠意説の絶対的立場が新王学として高く評価できることを強調されたのである。

本体と工夫の論は宋明学の実践論の根底となるものであり、伝統的古典を熟読、精思して体察、体認すべきものであると考えられたのであろう。

この論文の冒頭において、先生は禅門の悟境と儒門の悟境を比較して次の如く言う。

儒教が究竟の地とする心は、人心の自主性を否定して超越的見地から求められた単なる人間活動一般に即する無の絶対性に立脚する禅と異なり、その自由性そのままが「天地を位し万物を育する」宇宙の心であって、随ってそれは自ら事物を経倫裁制する有無全一の絶対無に立脚するものであった（同論文57頁）

禅門の悟境は「水上のひょうたんが、押すと動きおさえると転ぶ。真に大自在を得たもの」という雪堂行和尚の語をあげて示し、儒門の悟境は「水上に舟を行るようなもので、舵が手中にあるから常に蕩々として如何なる危険も突破し、何処の岸にも自由に舟を着けることができるようなものである」と劉念台の語をあげ、続いて「即ちそれはただ徒に転々自在する心ではなく定向ある主宰としての存在であり、人心は此の主宰によって始めて真の自在を得、本来の道徳的生命を保持する。」（同上）と比較分析を行なっておられる。

後にこの論文は『王陽明と明末の儒学』の第九章第三節「劉蕺山」のところに収載された（昭和四十五年八月、明徳出版社刊）。文章は少し整えられ、削られている部分がかなりあるが、全体の構成は変らない。この論文を読むと、過去の伝統的学問の遺産が現在によみがえる感がし、先生の体認の学とは、過去の遺産の蘇生を通して自己を新たに形成し直す内省的心術あるいは心法であることが察せられる。先生の体認の学は、程朱の理学よりも陸王の心学に基盤を置き、更に東林学派の高忠憲の静坐論と劉念台の誠意説をよりどころとしたようである。従って与件としての体認の学は陸・王・高・劉の人格から決して眼を離すことのできないものとなったのである。

先生は昭和五十二年（一九七七）六月、六十八歳のとき、米国カリフォルニア州モンテレーで開かれた国際学会

「清朝初期思想学会」に出席して三つの重要にして根本的な自分の考えを述べられた。

第一は思想史の研究について、西洋思想と東洋思想、仏教・道教・儒教を通じて、人格が最も重要である。背景としては政治・経済のほかに美術にあらわれた時代精神が重要である。朱子学・陽明学が、これらによってよくわかる。

第二に思想史の問題も重要であるが、儒教が現代の社会においてどれほどの意味、価値をもつかということを考えることも重要である。伝統の中から何が世界性をもちうるかということを考えることが重要である。その場合、現代人のもっている悩みを忘れては、そういう研究はできない。

第三に儒教を私は信仰しているが、目下、日本でも儒教精神は衰退しつつある。

この三つの観点は、岡田先生一生の学問を簡潔にそして明確に要約したものといえよう。

劉念台については、昭和五十五年（一九八〇、七十一歳）に明徳出版社の中国古典新書の一冊として「劉念台文集」というタイトルで「劉念台の生涯と思想」及び本文を十二章に分けて構成する内容の書物を刊行された。この書物の刊行により、劉念台の人と学問の特色というものが、広く世の中に知られるようになった。例えばハーバード大学の杜維明教授と復旦大学の東方朔教授共著の『杜維明学術専題訪談録—宗周哲学之精神与儒家文化之未来』（二〇〇一年八月　復旦大学出版社）の「附録一　劉宗周哲学人類学中的主体性」の中で杜維明教授は、劉宗周の「良知説」に関しての詳細な討論は、岡田武彦『劉念台文集』（東京・明徳、一九八〇）第一八七—一九九頁に見られる、と注記して岡田先生の「良知説」の学問的意義に注目している。

五、九州大学時代（二）

杜維明教授は、これより前、「清朝初期思想学会」があった同年、八月二十四日付の「中国時報」の中で「岡田武彦先生の儒学」という題で、岡田先生の『坐禅と静坐』を取り上げて「この書物は身心の教育について専門討論したもので、アメリカの教育と研究において最も欠けていると感じるのは、まさしくこの種の沈潜内斂の反省工夫により

体究する東洋の体験の学であるということです。六十八歳の先生は、勇猛精進の好学の士です。」と称賛している。杜維明教授はいわゆる新儒家の第三世代に属する学者であるが、岡田先生の体認の学を深く理解されている一人といえよう。

『坐禅と静坐』は、昭和四十年九月、先生が五十六歳の時、長崎県教育委員会から発行された。副題には「楠本端山の静坐体認論」とある。

これより先、昭和二十九年、先生四十五歳の頃、楠本先生から『楠本端山先生遺書』を贈られ、読んでみるように言われた。先生はその時のことを「私は早速それを一読して驚嘆し、それによって、「道統、我にあり」との自覚を持つとともに、いよいよ静坐をもって学の宗旨とするに至った。」（同書253頁）と述べておられる。楠本端山は楠本先生の祖父にあたり、幕末維新期に活躍した闇斎学派の儒学者である。若い頃、佐藤一斎の門に入り、その高弟、吉村秋陽や大橋訥庵と師友の交りをし、特に訥庵からは、日本の儒者の中で、たのむにたる者は西海の端山だけである、と高く評価され、訥庵の『闢邪小言』の書物の跋文を依頼されるほどであった。後に端山は、三宅尚斎の流れをひき、静坐体認を主とする熊本の月田蒙斎の道統に、弟の楠本碩水や碩水の知己の小笠原敬斎とともに、つながることとなる。岡田先生によれば、端山は身心の修業実践を根本とする儒学者であり、静坐によって仁を体認し、それを詩文に表現し、また政治実践に具体化した人物である。

岡田先生の楠本端山研究は、昭和三十二年三月に発行された文部省助成金による総合研究の成果として、「楠本端山の思想」（『九州儒学思想の研究』別冊所収）として発表された。後、昭和三十四年十月一日、思想のほかに伝記部分も加入して、福岡市の積文館書店から『楠本端山―生涯と思想』として刊行された。自費出版であった。

楠本正継先生は、この書物に序文を書かれたが、その中で京都大学の西谷啓二教授の楠本先生宛の私信を披瀝されている。

> 随分透徹した問題が過去に於て、然も地方で思索されて居たことに驚いた次第です。各地方で同じ様な紹介がなされたら、日本の精神史も別な観をなすかも知れぬと感じました。昔ドイツに留学してゐた時、各地方の文化が

その土地に住む学者によって研究され、それがまた綜合されて行く状態を知って感心しましたが。

この西谷教授のことばは、楠本先生は、もとより、過去の学問的遺産を現在に蘇生させることの意義が理解されたことで、岡田先生に勇猛心を与えるものであったと思う。

この序文の中で楠本先生は、「端山歿後七十有六年にして一の知己を得た」と二度くりかえし述べられた。それは端山の静坐体認の学と岡田先生の倫理道徳の根本問題を内省的に問う現在の心とが活溌々地に通融したことを認められたからであろう。

『坐禅と静坐』が書かれたのは、前述の副題を見てもわかる通り、楠本端山研究の一環としてであった。昭和四十三年四月に東出版、さらに昭和五十二年六月に大学教育社から再版された。昭和四十年、長崎県教育委員会発行の書物に比べると、加筆がかなりあり、分量も多くなっているが、基本的論調と構成内容は変るところがない。当時、このような書物は少なかったので、好評でかなり多く読まれたようである。

海外でこの書物に最も関心をいだいたのは、米国コロラド大学のロドニー・テイラー教授である。同教授によると、米国には坐禅とか道元に関する本は多く翻訳されている。坐禅と静坐という二つのレベルについて、そのギャップをうずめるために翻訳紹介し、広く学問を志している人に喜んでもらいたい、という話であった。同教授は、コロンビア大学のド・バリー教授の門下生で、学位論文は「高忠憲論」であった。同教授は岡田先生を福岡に二度訪ね、質疑応答を交わして学問的研鑽を積まれ、『坐禅と静坐』の重要なところを英訳され、かつ岡田先生の話を聴いて『現代の儒家の道—静坐』(The Confucian Way of Contemplation—静坐)を出版された。『坐禅と静坐』の「まえがき」の中で岡田先生は次の点を強調された。

坐禅といい静坐といっても、もとは心を落ちつけるための術、いわば精神統一、精神集中の術である。しかし坐禅や静坐がこれだけを目的とするならば、それは消極的意味しか持ち得ないであろう。それが積極的な意味を持つためには、それが人生観、社会観、いわば形而上学と一緒になって行じられなければならない。

テイラー教授も、この「積極的意味」を十分にくみとり、特にこの書物の第四章は、学問的、研究的な面で、学問

を志している人に喜ばれるのではないだろうか、と指摘。さらに翻訳は一章ごとに岡田先生に送るので、先生にチェックをしていただきたい、そしてド・バリー教授と杜維明教授に最終稿を送って完成したいとして、はじめられたようである。

昭和三十一年十月、米国ロックフェラー財団より楠本正継先生は研究助成金として一万ドル（当時の三六〇万円）を受け取られ、九大文学部に臨時に宋明思想研究室が設置され、三年間続いた。メンバーは楠本先生の下に滝沢克己（文学部教授・倫理学）猪城博之（西南学院大学助教授・哲学）山室三良（文学部助教授・中国哲学）岡田武彦（教養部助教授・中国古典）荒木見悟（福岡学芸大学助教授・中国哲学）の諸先生方と、中哲研究室助手の佐藤仁氏、及び宋明思想研の臨時助手の筆者（当時、大学院生）の八名で研究が行なわれた。

楠本先生は、その研究の成果として『宋明時代儒学思想の研究』という名著を出版され、西日本文化賞、そして朝日文化賞を授与された。研究会が頻繁に開かれ、岡田先生は、その中心的存在として研究発表をされ、さらに楠本先生所蔵の天下の孤本『朝鮮写本徽州刊朱子語類』を用い、明、弘治版の『朱子語類』を参考にし、和刻本の『朱子語類』の校勘を行なわれた。佐藤仁氏・中川嘉彦氏と筆者も手伝った夏の暑い日をなつかしく憶い出す。

岡田先生は、その時の研究成果の一部として『朱子語類校勘記其の一』を出版され、ついで昭和三十五年三月に「明末儒教の動向」という論文を発表された。

この論文の中で宋明思想研究室の所蔵となった明版『李氏説書』の書誌学的究明もされたが、主として、明代の精神文化や社会思潮と融合して流行した陽明心学とその発展、影響等を論じられたものである。王学左派（現成派）、王学右派（帰寂派）、王学正統派及び、これら三派の亜流、湛甘泉一派、陸王や仏老を批判した批判派、さらに東林学派、最後に劉念台をとりあげ、「動的な心体を本とする陽明の思想は、念台に至って新展開を遂げた。」（同論文12頁）と結ばれている。

岡田先生は「劉念台の誠意説」を書かれた後に、東林学（昭和二十八年）より王門三派、湛甘泉・李見羅・呉廷翰・郝楚望・許敬庵（昭和三十四年）などの思想究明を連続的になさっている（論文目録参照）。そして昭和三十五年

（五十一歳）には「明末の儒教」という題目の論文により文学博士の学位を授与された。従って、この「明末儒教の動向」はその当時のご研究の概要をきわめて簡潔に述べられたものである。その後、更に明代儒教思想の研究は鋭意、精力的に続行され、昭和四十五年（六十一歳）に先生のライフワークとでもいうべき、名著『王陽明と明末の儒学』を明徳出版社から一〇〇〇部限定で、しかも自費出版という形で刊行された。

これより前、昭和三十七年（一九六二）十二月二十三日に楠本正継先生が病気により亡くなられた。早すぎる逝世であった。岡田先生は、それまで高眠斎を称し、学究の道に没頭されていたが、それから三年後、楠本先生の学統を継ぐ学者として、昭和四十一年、米国コロンビア大学の客員教授として短期間（六カ月）ではあったが、渡米された。前述の「清朝初期思想国際学会」の時に、ド・バリー教授は、岡田先生との出会いについて次のように述べられた。

岡田先生の全力を通す情熱には感心します。自分の学問、自分の学生にも非常に関心がおありで、岡田先生は黄宗羲の言った独特の伝統の代表者の一人であると信じます。私が岡田先生とはじめて知りあった経過は、ロックフェラー財団に務めておられたDr. Farsという方がおられましたが、この方は楠本先生の学問に興味を持っておられました。Dr. Fars氏の紹介で岡田先生に会うことができたのです。

Dr. Fars氏の名は筆者も記憶している。宋明思想研究室を拠点とする活動状況、それは研究経過と助成研究費の支出報告を含むものであったが、定期的に楠本先生のご指示により、Dr. Fars氏に報告していた。筆者の役割であった。

コロンビア大学の「明代セミナー」は米国在住の陳栄捷教授、香港の唐君毅教授、オーストラリア、キャンベラ大学の柳存仁教授と岡田先生が参加し、司会はド・バリー教授がつとめられたようである。セミナーの対象は大学院生で、テーマを与えられて発表するものであった。しかし彼等は原典をしっかり読まないで、解説書を読んで意見を述べたので先生は失望されたようである。

セミナー終了後、イリノイ大学で「国際明代思想研究会」に出席、日本からは東京教育大学の酒井忠夫教授が参加された。以上、名前をあげた方々は当時、それぞれの分野の権威の方々で、先生は以後、ずっと親しく交際を続けられた方々であった。しかし学会では必ず先生は自分の意見をはっきりと強く表現され、意見が対立することもしばし

ばあったようである。コロンビア大学で、インド哲学の羽毛田教授は『荘子』の演題を担当されていたが、学生達が原典を日本語で漢文読みされているのを見て驚かれた、という（同書306頁）。

これ以後、岡田先生は、単に学究生活にのみ集中するだけではなく、広く学問を現実に生かす実践的方向に進まれるようになる。内面的研究による精神の緊張力を持続しながら、学統、道統の自覚による使命感とも呼ぶべきものが形成されたのだと思う。そしてそれは楠本先生の早すぎる逝世に大きく関わっていると見なければならない。

昭和四十三年、五十九歳の時、先生は文部省科研費の「朱子語類の総合的研究」の統括責任者として、全国規模の研究を推進されることになる。この時、筆者は『朱子語類』の各種版本の調査を命ぜられた。入矢義高先生から懇切なご指導をいただいたことを記憶している。総合研究は学者間の交流と地区、大学の枠を越えた有機的な結びつきをもたらした。その翌年の六十歳の時に先生は九州大学教養部長の要職に就かれたが、折りしも大学の学園紛争の激しい中で、わずか五カ月間で教養部長を辞任された。病気入院されたからであった。

先生は六十歳の頃、小悟を得た、という。悟ったものは、宇宙の根本実在で、それは言語表象を超えるもので、敢えて述べれば「唯だ是れ（ただ…である）」としかいいようがない、という。（同書369頁）そこで「高眠斎」から「唯是庵」に書斎名が変わった。その頃「偶成」という題の詩を作っておられる。その中に「嗟斯の人にあらずして誰にか帰せん」という一句がある。この「斯人」という孔子の言葉（『論語』微子篇）が、先生の心の中で重要な意味をもつようになり、七十歳の頃に明確な自覚を持つようになったので、書斎名を「斯人舎」と名付けたといわれている（同書374頁）更に平成十年（八十九歳）の一月に今年より室号を「自然斎」に改めよう（私家版『語録』151頁）と言われている。「高眠斎」には、閑居して高枕安眠をねがう、孤独を愛する先生若年の意志が、かいま見えているが、「唯是庵」から「斯人舎」に書斎名が変わるにつれて、「斯の人」に対する思いやりの心、誠の心のおのずからなる発露によって、人々と共に生きる共生の思想が確立して、孤独は超克された。最晩年の「自然斎」は、日本人は古来、物をすべて神として敬う、日本の伝統的精神を称賛して名付けられたが、平成十二年（九十一歳）の語録をみると、「三生意説」を説いて、生意とは「いのち」のことであり、生には三義があるとして一、自ら生きる。二、他を

生かす。三、ものを生むことで神道の産霊（むすび）でもある。この三つが一体であるところに人間の本性がある（同書214頁）と究竟の到達点を示されたと思う。

岡田先生には宋明儒学思想関係の研究論文のほかに「東洋思想の現実と理想」（五十四歳）、また「毛沢東試論」（五十九歳）のような現代中国に関する論文、そして『東洋の道』（六十歳）のように、中国思想全体を「現実主義」「超越主義」「理想主義」の三つのパターンに類別し、一般読者を想定して書かれた啓蒙的書物もある。更に『王陽明文集』（六十一歳）のような王陽明の生涯を原典を用いながら、わかりやすく解説した書物、『幕末維新陽明学者書簡集』（共著、六十二歳）『近世後期儒家集』（共著、六十三歳）のような、日本儒学思想に関する校注等がある。また「王畿と現成主義の展開」（英文）（六十一歳）がコロンビア大学出版から出されており、先生の研究活動の多様性と活溌性とを知ることができる。

昭和四十七年三月（六十三歳）先生は九州大学教養部教授を定年退職、名誉教授となられたが、同年、台湾において中華学術院栄誉哲士の称号を授与された。国際的に活躍された先生の側面を物語るものであろう。

六、九大退職後の研究活動

先生は九大退職後、同年、西南学院大学国際文化学科教授、昭和五十五年四月（七十一歳）活水女子短大、ついで活水女子大学教授、そして平成元年三月（八十歳）に退職された。この間、先生の研究活動は、従来に比して益々盛んとなった。今、国際学会への出席についてみてみたい。

昭和四十七年六月（六十三歳）、ハワイ大学における「王陽明生誕五百年記念学会」で「明末と幕末の朱王学」「王陽明と日本文化」について発表、昭和四十九年六月（六十五歳）ハワイ大学において「東洋十七世紀の実学研究」の学会に出席、「貝原益軒の実学と朱子学」について発表。昭和五十二年六月（六十八歳）米国加州モンテレーにおいて、「清朝初期思想国際学会」に出席、「戴震と日本古学派の理学批判論」を発表。昭和五十五年八月（七十一歳）台

湾中央研究院主催の「国際中国学会」で「中国哲学の課題と簡古の精神」を発表。昭和五十六年四月（七十二歳）米国、セント・ジョーンズ大学のアジア研究所の「江戸時代の文芸と思想」学会で「幕末維新の朱王学の課題」を発表。同年十一月に韓国ソウル市の「退渓先生誕生四八〇周年記念国際学術会議」で「楠門学と李退渓」を発表。昭和五十七年七月（七十三歳）ハワイ大学の「国際朱子学会」で「朱子と智蔵説」を発表。昭和五十八年四月（七十四歳）台北市の「中国・韓国・日本・文化交流討論会」で「新儒教の日本的受容」を発表。昭和六十年五月（七十六歳）台北市の「中国・韓国文化交流学会」で「退渓学の評価について」発表。同年八月には筑波大学の「国際退渓学会」で「退渓学における存養の問題」を発表。このようにみてくると、先生は積極的に海外に出遊して発表されるだけでなく、研究分野も宋明儒学思想及び江戸期の儒学思想の研究のほかに、韓国の朱子学者、李退渓の思想研究、清朝初期思想の研究、中国哲学の現代的課題、新儒教の受容論といった比較思想論にまで研究の幅が広くなっていかれた。発表論文も「明末及び徳川時代における朱子学派と陽明学派」（六十四歳）「朱子学派における実学―山崎闇斎と貝原益軒」（七十歳）はそれぞれ英文で刊行、また「中国哲学的課題與簡古精神」（七十二歳）は中文で刊行されたので、広く外国の学者にも岡田先生の学問の特色が理解されるようになったといえる。西南学院大学の王孝廉教授の『一個儒学家的人生歴程―岡田武彦先生的治学與生平』（一九八五年二月）は、先生の学問と生涯を中文で紹介したもので、先生の三篇の論文の翻訳（中文）を含めており、海外で岡田先生の学問と生涯が広く知られる上で大きな役割を果たした。

この期間の先生の著書や論文については、後の業績目録を見ていただければ一目瞭然のように、豊富で、研究意欲の旺盛さを知ることができる。

先生の学会活動は九大在職中からずっと続いている。昭和四十四年十月から四十七年四月までは、九州中国学会会長を務められたが、昭和四十二年四月から日本中国学会評議員、昭和四十六年四月からは日本中国学会理事に就任、また昭和五十一年一月からは、東方学会全国評議員に就任、それぞれ任期一杯務められた。その後、東方学会名誉会員、日本中国学会顧問となられ、学会の指導的役割を長期にわたって果たされた。

海外においても、国際陽明学研究中心（浙江省社会科学院）学術顧問及び名誉研究員、孔子文化大全編輯部学術顧問・世界孔子大学籌建会名誉籌建主委・永久名誉校長、孔子大同礼金籌建会名誉籌建主委・永久名誉主委、国際儒学聯合会顧問、李退渓学会（韓国、日本）顧問、李退渓国際学術賞審査員（韓国）の任務につき、国際的にも指導的役割を果たされたのである。

また文化大革命によって破壊された王陽明の墓の修復を計画、日本全国からの募金によって竣工を支援された。一九八六年から一九九六年の間、浙江省社会科学院の協力によって、五回に及ぶ中国全土の王陽明遺跡を探訪調査し、王陽明ゆかりの地に記念碑を建立、建造物修復を支援された。

先生はまた若い学徒のために、九州大学教養部を拠点として『朱子語類』『王陽明全集』『明儒学案』等の読書会を組織主宰し、若い学徒を育成されるのに尽力された。その活動は、四、五十年に及ぶ長期にわたるものであった。

次に若い学徒と学術発展のために、中文出版社の李廼揚社長と協力して『和刻本漢籍叢刊』（影印本）を続々と刊行されると共に、『復刻陽明学』『王学雑誌（復刻）』など関係のある雑誌の復刻にも力を注がれた。

主として明徳出版社からは、『陽明学大系』『朱子学大系』『叢書・日本の思想家』『陽明学シリーズ』『王陽明全集』『陽明学の世界』『佐藤一斎全集』などを編集あるいは監修され、先生ご自身も何冊か執筆された。この企画によって門下生のみでなく、日本全国の若い学徒まで広く育成されたのであった。

先生ご自身の著述も数多くある。中国思想関係のもの、日本儒学関係のもの、比較文化論的なもの、韓国儒学関係のもの、一般の読者を対象とした啓蒙的な書物など、豊富な著作に驚かされるほどである。

先生は地域社会の文化の発展にも配慮され、西日本新聞社の『西日本人物誌』『福岡人物誌』の編集ならびに執筆に力を尽くされた。そして平成十二年（九十一歳）十一月三日、西日本文化賞（学術文化部門）を受賞された。

平成十五年（九十四歳）に、『崇物論―日本的思考』を著わされ、先生の学問の究極の到達点を明らかにされた。

この書物の中で先生は自分が最後に回帰した日本的なものとは、簡素の精神であることを強調され、真の世界的思考とは、日本の崇物的思考と西洋の制物的思考と一体となるところに成立すると予言され、「身学説」を書いて、

兀坐(こつざ)して身命の根を培養することが大切であるとされた。

朱子学を学んで、最後には垂加神道を立てた山崎闇斎に似ている一面があり、先生ご自身も、それを認めておられるけれども、『崇物論』は現代に生きる人々を対象として、わかりやすく書かれた啓蒙書で、先生永年の学問研究と実践とを総合的にまとめた結論と言えるものである。混迷をきわめている現代の社会に大きな警鐘を鳴らし、また一つの方向を示すものになりうるものであろう。

岡田先生は一生涯を通じて自己の信ずる道を好み楽しんでこられたように思う。「高眠斎」から「斯人舎」へと書斎の号を変えられ、人と共に生きる共生の思想が孔子の精神の基本であり、人間の本来性であるとし、共に生きるためには、自分がこの精神に徹しているかどうかを常に反省していく必要があり、修身が必要である。修身に精進して、共に生きる理想を世の中に実現しなければならないと強調された（『碩学に聞く』昭和61・5 竹井出版 268頁）。

岡田先生は、自己の発見した道を信じ、好み、楽しんで、他人の非難や批判にとらわれないところがおありになったように思う。特に市民講座や書院教育に、積極的かつ熱心に取り組まれ、共に学び、共に生きる姿勢を貫いて、終生変わるところはなかった。

先生いう「今ごろ修身といって大の保守主義者、封建論者という人がいるかも知れませんな。そして右翼というものもいるでしょう。修身はそれとは全く無関係であることは、『大学』を見ればわかるでしょう。」（同書262頁）と風評にとらわれず、灑々落々の、からりと明るい態度を持ち続けられたのである。

伝記作家で有名な小島直記氏は「私に余命があればいくつか取り上げたい名著があるが、岡田武彦著『簡素の精神』はその一つである。（中略）多くの名著があるとのことだが、すべてを味読する持ち時間はない。『簡素の精神』ただ一冊で十分であり、輪読会同志諸氏に読んでもらいたいと念ずる理由は、「プラス思考」の模範だと信ずるからである。」（『私家版、語録』194頁）と高く評価されている。

また難波征男氏編の岡田武彦・張岱年対談『簡素と和合―対立から大同の世紀へ』を読んでも、そこには岡田先生のいわゆる「プラス」思考が年とともに東洋的実践を通して深まっていっている感が強い。

「東洋の心を学ぶ会」の市民の皆さんも、この会に出て岡田先生の講話を拝聴すると、「元気」をいただける、と先生の「プラス」思考に勇気づけられて、会に出席するのが楽しいと述懐されている方が多い。

岡田先生は身体が若い時から虚弱であるとされながら、九十六歳近くまで、長生きされたのは、常にその側に名医の存在があったことと無関係ではない。健康には充分すぎるほど留意され、いいと言われると何でも積極的に試みられ、そして強い使命感をもって生きられたように思う。平成六年、福岡市で、「シンポジウム・貝原益軒を考える会」「東アジア伝統文化国際会議」が開催された時には八十五歳のご高齢で会長を務められ、また平成八年の「国際陽明学京都会議」で議長を勤められた時には八十八歳の米寿を迎える年であった。先生は若い時、海外の国際学会に頻繁に出席して学問的恩恵と暖かい人的交流を持つことができたことを感謝して、今度は自分が恩返しをする番であるとして、日本で大きな国際学会の責任担当者となられた。その使命感と情熱は学ぶべきところが大である。

先生が逝世される二週間前にあたる昨年十月二日（日）に疋田啓佑・呉端両氏と先生を書斎に訪ねた時、先生は私達に臥坐を実践して見せて下さったような気がする。『荘子』斉物論篇に出てくる「南郭子綦」のように見えた。先生はその時、「天籟」を聴いておられたのであるかも知れない。やがて別れを告げる時、先生は、もとにもどられ、強く私達の手を握りしめられた。私達は、その時、先生から何かしら「元気」をいただいて帰路に就いたのであった。巨星墜つの感しきりの昨今である。もう直接、先生にお会いして、教えていただくことも、「元気」をいただくこともできない。今からは各自が、それぞれの信ずる道を歩んでいくことが先生の教えであろう。不肖の弟子はこのように考えている。

〔付記〕後の「岡田武彦先生年譜」「岡田武彦先生業績」目録は、疋田啓佑氏が作成したものである。

岡田武彦先生年譜

一九〇八年（明治四一年）一一月二二日　兵庫県白浜村字中村（現、姫路市白浜町）にて父重成、母たきの第五子として出生。地元の中学校を卒業後、一九二八年（昭和三年）四月に姫路高等学校入学。
一九三一年（昭和　六年）旧制姫路高等学校卒業
一九三二年（昭和　六年）九州帝国大学法文学部入学
一九三四年（昭和　九年）九州帝国大学法文学部支那哲学史専攻卒業
旧制富山県立神通中学校教諭
一九三八年（昭和一三年）旧制宮崎県立延岡中学校教諭
一九三九年（昭和一四年）旧制福岡県立中学修猷館教諭
一九四三年（昭和一八年）長崎県師範学校教諭
一九四五年（昭和二〇年）熊本陸軍幼年学校教官
一九四五年（昭和二〇年）熊本補導講習所嘱託
一九四六年（昭和二一年）福岡県中学修猷館教諭
一九四七年（昭和二二年）福岡県立修猷館高等学校教諭
一九四九年（昭和二四年）九州大学文学部助教授兼第三分校助教授
一九五一年（昭和二六年）九州大学第二分校助教授
一九五三年（昭和二八年）九州大学文学部講師（中国哲学史）併任
一九五八年（昭和三三年）九州大学教養部教授
一九六〇年（昭和三五年）文学博士
一九六六年（昭和四一年）米国・コロンビア大学客員教授

一九六七年（昭和四二年）日本中国学会評議員
一九六九年（昭和四四年）九州大学教養部長、九州中国学会会長
一九七一年（昭和四六年）日本中国学会理事
一九七二年（昭和四七年）九州大学定年退官、九州大学名誉教授、中華学術院栄誉哲士
一九七二年（昭和四七年）西南学院大学文学部教授
一九七六年（昭和五一年）東方学会評議員
一九七七年（昭和五二年）活水女子短期大学教授
一九八一年（昭和五六年）叙勲三等、授与旭日章
一九八二年（昭和五七年）活水女子大学文学部教授
二〇〇〇年（平成一二年）西日本文化賞（学術部門）受賞
二〇〇四年（平成一六年）一〇月一七日　逝去　享年九五歳

岡田武彦先生業績

〔著書〕

(1)『明代儒学者一覧付索引』（編集）　九大文学部宋明思想研究室　昭和三二年三月
(2)『朱子語類考勘記』(一)（編集）　九大文学部宋明思想研究室　昭和三四年九月
(3)『楠本端山－生涯と思想』　積文館　昭和三四年一〇月
(4)『坐禅と静坐』　長崎県教育委員会　昭和四〇年九月　東出版　昭和四三年四月　（再版）大学教育社　昭和五二年六月

(5)『明末儒教の動向』　九大宋明思想研究室　昭和三五年三月
(6)『東洋の道』　明徳出版社　昭和四四年一〇月
(7)『王陽明と明末の儒学』　明徳出版社　昭和四五年八月（中文訳『王陽明与明末儒学』呉光、銭明、屠承先 訳　上海古籍出版社　平成一二年）
(8)『朱子語類付索引』（編集）　中文出版社　昭和四五年八月
(9)『王陽明文集』（中国古典新書）　明徳出版社　昭和四五年一〇月
(10)『中国と中国人』　啓学出版　昭和四八年八月
(11)『続東洋の道』　明徳出版社　昭和五一年三月
(12)『宋明哲学序説』　文言社　昭和五二年五月（抄録版）『宋明芸術序説』昭和五二年一一月（改訂版）『宋明哲学の本質』　昭和五九年一一月
(13)『楠本端山』（叢書日本の思想家　第42巻）　明徳出版社　昭和五三年一二月
(14)『劉念台文集』（中国古典新書）　明徳出版社　昭和五五年四月
(15)『江戸期の儒学―朱王学の日本的展開』　木耳社　昭和五七年一一月
(16)『中国思想における理想と現実』　木耳社　昭和五八年九月
(17)『山崎闇斎』（叢書日本の思想家　第6巻）　明徳出版社　昭和六〇年一〇月
(18)『貝原益軒』（叢書日本の思想家　第9巻）　明徳出版社　昭和六〇年一二月
(19)『王陽明と現代』（活学シリーズ3）　関西師友協会　昭和六二年
(20)『林良斎』（叢書日本の思想家　第29巻）　明徳出版社　昭和六三年四月
(21)『私と陽明学』（郷研叢書　第5集）　日本郷学研修所　昭和六三年一一月
(22)『現代に生きる論語』　熊谷八州男と共著　文言社　昭和五四年一〇月
(23)『王陽明』（上・下）（シリーズ陽明学第2・3巻）　明徳出版社　平成元年五月・平成三年五月

(24)『わが半生・儒学者への道』　思遠会　平成二年一一月
(25)『現代の陽明学』　明徳出版社　平成四年一一月
(26)『孫子新解』　日経ＢＰ社　平成四年一二月
(27)『儒教精神と現代』　明徳出版社　平成六年三月
(28)『東洋のアイデンティティ―中国の思想家に学ぶ』　批評社　平成六年四月
(29)『王陽明小伝』　明徳出版社　平成七年一二月
(30)『王陽明紀行―王陽明の遺跡を訪ねて』　登龍館　平成九年八月
(31)『簡素の精神』　致知出版社　平成一〇年八月
(32)『警世の明文　王陽明抜本塞源論―王陽明の万物一体思想』　明徳出版社　平成一〇年九月
(33)『簡素と和合―対立から大同の世紀へ―』（難波征男編）　中国書店　平成一一年五月
(34)『将来世代への立志の贈り物　陽明学』　将来世代国際財団　平成一二年五月
(35)『私家版・岡田武彦先生語録』　森山文彦刊　平成一二年五月
(36)『陽明学つれづれ草―岡田武彦の感涙語録』　明徳出版社　平成一三年四月
(37)『ヒトは躾で人となる』　登龍館　平成一三年一二月
(38)『岡田武彦全集』　明徳出版社
1『王陽明大伝』一　―生涯と思想―　平成一四年一二月
2『王陽明大伝』二　―生涯と思想―　平成一五年四月
3『王陽明大伝』三　―生涯と思想―　平成一五年一一月
4『王陽明大伝』四　―生涯と思想―　平成一六年一一月
10『王陽明と明末の儒学』上　平成一六年六月
11『王陽明と明末の儒学』下　平成一六年六月

12『孫子新解』　平成一五年九月

(39)『崇物論―日本的思考―』　自家版　平成一五年八月

〔監修・編集〕

(1)『陽明学大系』全一三巻（明徳出版社）　昭和四六年

(2)『朱子学大系』全一五巻（明徳出版社）　昭和四九年

(3)『王陽明全集』全一〇巻（明徳出版社）　昭和五七年

(4)『佐藤一斎全集』全一四巻（明徳出版社）　平成二年

(5)『和刻影印近世漢籍叢刊』（思想編）一二巻（中文出版社）　昭和四七年

(6)『和刻影印近世漢籍叢刊』（思想続編）一四巻（中文出版社）　昭和五〇年

(7)『和刻影印近世漢籍叢刊』（思想三編）一六巻（中文出版社）　昭和五二年

(8)『和刻影印近世漢籍叢刊』（思想四編）一四巻（中文出版社）　昭和五九年

(9)『和刻影印朱子語類』全八巻（中文出版社）昭和四八年

(10)『復刻陽明学（鉄華書院刊本）』全四巻（木耳社）　昭和五九年

(11)『王学雑誌』上下巻（復刻）（文言社）　平成四年

(12)『叢書日本の思想家』全五〇巻（明徳出版社）　昭和五二年

(13)『シリーズ陽明学』全三五巻（明徳出版社）　平成元年

(14)『福岡人物誌』（西日本新聞社）　平成五年（のち『西日本人物誌』に改める）

(15)『中華五千年史　孔子と現代』上・中・下巻（張其昀著）（文言社）　昭和六〇・六三年

(16)『陽明学の世界』（明徳出版社）　昭和六一年

〔論文等〕

(1)「兵法の形而上的考察―孫子の兵法」『時潮』　昭和一五年
(2)「技と心」『哲学年報』第一三輯　昭和二七年
(3)「劉念台の誠意説」『哲学年報』第一四輯　昭和二八年
(4)「東林学の精神」『東方学』6号　昭和二八年
(5)「良知現成論の成立―王龍渓の学的精神」『哲学年報』第一五輯　昭和二九年
(6)「良知帰寂派の学的精神」『哲学年報』第一六輯　昭和二九年
(7)「湛甘泉の学的精神」『哲学年報』第一八輯　昭和三〇年
(8)「王学正統派の学的精神」『九州中国学会報』第二巻　昭和三一年
(9)「楠本端山の思想」『九州儒学思想の研究』昭和三二年
(10)「儒家の和の精神」『問題と研究』12月号　昭和三二年
(11)「李見羅論」『テオリア』第2輯　昭和三三年
(12)「呉廷翰と赫楚望」『テオリア』第3輯　昭和三四年
(13)「許敬庵の克己説」『九州中国学会報』第五巻　昭和三四年
(14)「明末儒教の動向」　九大宋明思想研究室　昭和三五年
(15)「王門現成派の系統」(一)『テオリア』第5輯　昭和三六年
(16)「湛門派の系統」『テオリア』第6輯　昭和三七年
(17)「王門帰寂派の系統」『テオリア』第7輯　昭和三八年
(18)「東洋思想の現実と理想」『東洋の理想と叡知』第一巻　昭和三八年
(19)「陳清瀾の批評論」『九州中国学会報』第一〇巻　昭和三九年
(20)「王門現成派の系統」(二)『テオリア』第8輯　昭和三九年

(21)「朱陸同異論源流考」『目加田誠博士還暦記念中国学論集』　昭和三九年
(22)「胡五峰論（上）―湖南学と朱子」『東洋文化』復刊第十号　昭和三九年
(23)「胡五峰論（下）―湖南学と朱子」『東洋文化』復刊第十一号　昭和四〇年
(24)「張楊園と陸桴亭」『テオリア』第９輯　昭和四〇年
(25)「理において根源的なものを悟ること」『テオリア』第９輯　昭和四〇年
(26)「明代思想の動向」『テオリア』第10輯　昭和四一年
(27)「毛沢東試論」『九州中国学会報』第一四巻　昭和四三年
(28)「呂晩村の朱子学」『テオリア』第11輯　昭和四三年
(29)「東林学(1)」『テオリア』第12輯　昭和四四年
(30)「東林学(2)」『テオリア』第13輯　昭和四五年
(31)「楠本端山遺書―未収草稿その一―」『九州中国学会報』第一五巻　昭和四四年
(32)「王陽明の教学精神」『近世東アジア教育史研究』　昭和四五年
(33)「王畿と現成派の展開（英文）」『明代思想における自己と社会』（コロンビア大学出版部）　昭和四五年
(34)「陸王学譜（上）」『陽明学入門』（「陽明学大系」第一巻）　昭和四六年
(35)「楠本端山遺言―未収草稿その二―」『九州中国学会報』第一七巻　昭和四六年
(36)「幕末維新陽明学者五子略伝」『幕末維新陽明学者書簡集』（「陽明学大系」第十一巻）　昭和四六年
(37)「明末と幕末の朱王学」（概説第二部）及び「解題（二）」『近世後期儒家集』（「日本思想大系 47）　昭和四七年
(38)「林良斎と近藤篤山との論学書について」『西南学院大学文理論集』　第一三巻第一号　昭和四七年
(39)「幕末の陽明学と朱子学」『日本の陽明学』（下）（「陽明学大系」　第一〇巻）　昭和四七年
(40)「朱子語類の成立とその版本」『問題と研究』３月号　昭和四八年
(41)「朱子語類の成立とその版本」『和刻本朱子語類大全』（中文出版社）　昭和四八年

(42)「明末と徳川時代における朱子学派と陽明学派（英文）」　東西センター（ハワイ大学）　昭和四八年
(43)「朱子の父と師」（上）『西南学院大学文理論集』第一三巻第二号　昭和四八年
(44)「朱子の父と師」（中）『西南学院大学文理論集』第一四巻第一号　昭和四八年
(45)「朱子の父と師」（下）『西南学院大学文理論集』第一四巻第二号　昭和四九年
(46)「楠本端山遺言―未収草稿その三―」『九州中国学会報』第一九巻　昭和四八年
(47)「林良斎と大塩中斎」『東洋文化』30・31・32 合併号　昭和四八年
(48)「劉念台解説」『陽明門下』（下）（「陽明学大系」第７巻）　昭和四九年
(49)「宋明の朱子学」『朱子学入門』（「朱子学大系」第一巻）　昭和四九年
(50)「劉念台と許敬菴」『宇野哲人先生白寿祝賀記念東洋学論叢』　昭和四九年
(51)「貝原益軒の儒学と実学」『西南学院大学文理論集』第一五巻第一号　昭和四九年
(52)「李延平解説」『朱子の先駆』（下）（「朱子学大系」第３巻）　昭和五〇年
(53)「幕末維新朱子学者書簡集解説」『幕末維新朱子学者書簡集』（「朱子学大系」第一四巻）　昭和五〇年
(54)「明末儒学の展開」『九州大学中国哲学論集』２　昭和五〇年
(55)「闇斎学の精神―儒学を中心として」『韓』第５３号　昭和五一年
(56)「経学における新古典主義と自由主義」『問題と研究』３月号　昭和五一年
(57)「宋明の実学とその背景」『西南学院大学文理論集』第一七巻第二号　昭和五二年
(58)「戴震と日本古学派の思想」『西南学院大学文理論集』第一八巻第二号　昭和五三年
(59)「唯気論と理学批判論の展開」『活水日文』第一号　昭和五三年
(60)「中国における現実主義思想の実体について」『韓』第８５号　昭和五四年
(61)「朱子学における実学―山崎闇斎と貝原益軒（英文）」『理と実学』（コロンビア大学）　昭和五四年
(62)「中国哲学の課題と簡古の精神」『国際漢学会議論文集』（台湾）　昭和五五年

(63)「楠本文庫と陽明学」『国士』創刊号　昭和五五年
(64)「中国古代の思想家たち」（一）『活水日文』第三号　昭和五五年
(65)「楠本端山と碩水」『楠本端山碩水全集』　昭和五五年
(66)「劉子全書及遺編」解説　『劉子全書及遺編』　中文出版社　昭和五六年
(67)「幕末維新における新王学の課題」『活水論文集』第二四集　昭和五六年
(68)「池田草菴の生涯と思想」『池田草菴先生著作集』　昭和五六年
(69)「中国人とその思想」『現代に生きる古典』　にっかん書房　昭和五六年
(70)「朱子語類解説」『朱子語類』（「朱子学大系」第六巻）　昭和五六年
(71)「中国古代の思想家たち」（二）（三）『活水日文』第四号、第五号　昭和五六年
(72)「朱子と智蔵」『国際朱子学会論文集』（ハワイ）　昭和五七年
(73)「朝鮮古写徽州本朱子語類序」『朝鮮古写徽州本朱子語類』　中文出版社　昭和五七年
(74)「中国古代の思想家たち」（四）『活水日文』第六号　昭和五七年
(75)「朱子の智蔵説とその由来および継承」『活水論文集』第二五集　昭和五七年
(76)「新儒教の日本的受容」『活水論文集』第二六集　昭和五八年
(77)「中国古代の思想家たち」（五）（六）『活水日文』第八号、第九号　昭和五八年
(78)「楠本端山の生涯と学問」『活水論文集』第二七集　昭和五九年
(79)「楠本端山の学問と現代」『斯文』第８８号　昭和五九年
(80)「対馬藩の儒学―基礎研究」（一）『活水論文集』第二七集　昭和五九年
(81)「中国古代の思想家たち」（七）『活水日文』第十一号　昭和五九年
(82)「復刻陽明学総論解説」『復刻陽明学（鉄華書院刊本）』木耳社　昭和五九年
(83)「宋明儒学思想の動向についての一考察」『中国哲学論集』12　昭和六一年

(84)「中国古代の思想家たち」『活水日文』第一二号　昭和六〇年
(85)「退渓学の評価について」『活水日文』第一三号　昭和六〇年
(86)「楠本端山遺言―未収草稿その四」『活水日文』第一三号　昭和六〇年
(87)「対馬藩の学問」（二）『活水論文集』第二九集　昭和六一年
(88)「湛甘泉と王陽明の関係」『斯文』第９１号　昭和六一年
(89)「〝格物致知〟を解説する」『致知』３月号　昭和六一年
(90)「日本人と陽明学」『陽明学の世界』　昭和六一年
(91)「儒教の養生訓」『活水日文』第一五号　昭和六一年
(92)「楠本端山遺書未収草稿　その五」『活水日文』第一五号　昭和六一年
(93)「現代の陽明になって日本を海外に伝えたい」『碩学に聞く』（笠井出版）　昭和六一年
(94)「ドバリー教授と〝朱子学と自由の伝統〟」『斯文』第９４号　昭和六二年
(95)「楠本端山遺書未収草稿　その六」『活水論文集』第三〇集　昭和六二年
(96)「儒教の万物一体論」『活水日文』第一七号　昭和六二年
(97)「楠本端山遺書未収草稿　その七」『活水日文』第一七号　昭和六二年
(98)「儒教の本質とその現代的意義」　第１回日韓福岡釜山『退渓学国際学会論文集』　昭和六三年
(99)「儒教の存養論と現代」『活水日文』第二二号　平成三年
(100)「孔子の根本精神」『時空を越えて―孔子と現代』　孔子の里　平成三年
(101)「王学雑誌総論解説」『王学雑誌』（復刻本）文言社　平成四年
(102)「朱子学と現代社会」『国際朱子学会議論文集』（台北）　平成五年
(103)「日本文化と簡素の精神」『東亜伝統文化国際会議論文集』平成六年
(104)「人間孔子」『江河万里流る』　亀陽文庫　平成六年

(105)「日本文化と簡素の精神」（一）　『郷学』第14号　平成八年
(106)「日本文化と簡素の精神」（二）　『郷学』第15号　平成八年
(107)「日本文化と簡素の精神」（三）　『郷学』第16号　平成八年
(108)「日本人の持つ簡素の精神は陽明学に通じるものである」　雑誌『盛和塾』第18号　平成八年
(109)「伊勢神宮と簡素の精神」　『瑞垣』第１７３号　平成八年
(110)「簡素の精神―日本人を日本人たらしめるもの」　『致知』８月号　平成八年
(111)「私の学問歴」　『韓日中退渓学国際学会論文集』　平成九年
(112)「神道に見る生き方の原点」（葉室頼昭氏との対談）　『致知』　平成九年六月号
(113)「日本の儒教と現代」　『耕心』第５４８号　平成九年
(114)「身学説を中心に――ある日の岡田先生のご講義から――」（森山文彦編）　『朋』第一号付録　平成九年
(115)「〝純粋な心〟への目覚めが明日を拓く」（林大幹氏との対談）　『ＭＯＫＵ』　平成十年一月号
(116)「我々はどのように生きるべきか」（第15回「知恵の輪」全国大会講演、森山文彦編）　『朋』第二号付録(一)　平成十一年
(117)「貝原益軒の養生訓の思想」（福岡老人問題研究会講演、森山文彦編）　『朋』第二号付録(二)　平成十一年
(118)「崇物論―日本的思考―」　『活水日文』　第四五号　平成一六年

楠本正継先生退官記念（昭和35年５月）

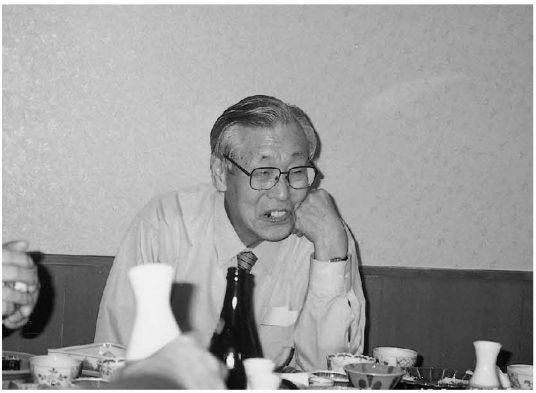
勲三等叙勲記念（昭和56年11月）

山室三良教授退官送別会（昭和43年３月）

岡田武彦先生御夫妻
（大橋自宅）

疋田啓佑
ド・バリー
岡田先生
杜維明
張立文

東アジアの伝統文化国際会議
（平成６年３月）



明儒学案研究会後の懇親会（平成４年）